

間投助詞はどのように位置づけられてきたか

伊豆原英子

要旨

間投助詞は、会話において終助詞と並ぶ大切な機能を果たしているにもかかわらず、終助詞と比べて論じられることの少ない助詞である。

本稿は、その命名者である山田孝雄以降、間投助詞がどのように位置づけられてきたかを跡づけようとしたものである。「ね、よ」のような、文中、文末に置かれる助詞をどう位置づけるかの問いをめぐって、これまでさまざまな議論が積み重ねられ、終助詞と間投助詞の立ち位置が徐々に明確にされてきた。終助詞が文の成立という機能と切り離せないものであるととらえられてきた一方で、間投助詞は、「聞き手」と強く関わる助詞であることが明らかにされてきた。

最近では、談話分析という手法での間投助詞研究もなされているが、間投助詞の会話における機能は、まだ十分明らかになっているとは言えない。本稿では、終助詞と間投助詞はそれぞれ別ものであるとする立場を提案したが、文中、文末に置かれる助詞の適切な説明をめぐってこれからも議論を続ける必要がある。

1. はじめに

終助詞、間投助詞という名称は、山田孝雄（『日本文法論』1929）によるものである。山田は『日本文法学概論』（1936: 508-531）で、終助詞を「述語に係属するものにして常に文句の終止にのみ用ゐらるるもの」で、「文末で用ゐられ、感動・希望・疑問・命令・禁止・念押し

などの意味を有するもの」、間投助詞を「語勢を添へ、若くは感動を高めむが為に用ゐらるるものにして、その位置他の助詞に比して稍自由なるもの」と定義している。

1992年に出版された益岡・田窪の『基礎日本語文法』では、「間投助詞」という名称は見当たらない。いわゆる「間投助詞」は、「終助詞の間投用法」という名称で呼ばれ、「文中の切れ目に挿入して、聞き手の注意を促す働きをする」ものとされている (p. 53)。つまり、益岡・田窪では、山田の名づけによる「間投助詞」は、助詞の一分野としての位置は与えられていないということになる。

小倉 (1985: 225) が述べているように「終助詞、間投助詞の分類基準、所属させる助詞の範囲は、文法学説の相違によって、必ずしも同じではない」のである。

本稿の目的は、山田 (1929, 1936) 以降、間投助詞がどう位置付けられてきたかを整理し、そこにどのような考えが反映されているかを明らかにし、加えて、間投助詞の位置づけを提案することである。第2節では、終助詞、間投助詞 (終助詞の間投用法など) が、山田から現代に至るまで、どのようにとらえられてきたのか、名称の変化はどのように位置づけられるのかを見ていく。続いて第3節では、間投助詞に焦点をあて、2節で明らかにされた点を整理する。そのうえで、談話分析的的手法による間投助詞研究をとりあげ、間投助詞の位置づけを提言する。

2. 終助詞、間投助詞はどう説明されてきたか

本節では、山田以降今日に至るまでのいくつかの研究論文、文法概説書の記述を概観し、終助詞、間投助詞 (終助詞の間投用法など) がどうとらえられてきたかを、助詞の現れる位置による分類を第1の基準にして分類する。それと同時に、研究者それぞれの終助詞と間投助詞の意味・機能・用法の説明と、所属する助詞の提示を必要に応じて行う。

2.1 文末に用いられるものを終助詞、文中・文末に用いられるものを間投助詞とする説

2.1.1 現われる位置の記述

このようにとらえる立場に立つものには、山田 (1929, 1936)、橋本 (1948)、田中 (1977)、仁田 (1982)、梅原 (1988) などがある。ここでまず、それぞれの研究者が、現れる位置について、どう記述しているかを簡単に見てみよう。

終助詞	間投助詞
山田 文句の終末にのみ用ゐらるるもの	その位置他の助詞に比して稍自由なるもの

間投助詞はどのように位置づけられてきたか

橋本	言ひ切りの文節の終にあるもの	文節（続く文節・言ひ切りの文節）の終に来るもの
田中	文末のみに用いられるもの	句末に用いられる（文中にも文末にも現れる）
仁田	命題に付く	命題及びいろいろな命題形成要素にかなり自由に付く
梅原	文末に位置する	文中の各種成分に比較的自由に付く

これらは「文句の終末、言ひ切りの文節の終、文末や句末」などと言ひ方は異なるものの、文末に用いられるものを終助詞、文中・文末ともに用いられるものを間投助詞としている点で相違はない。この分類の視点からすると、基本的に終助詞・間投助詞に重なりはないはずである。確かに、橋本（1948）は、終助詞として「ぜ、ぞ、とも、て、わ、な（禁止）、か、や、よ、い、等」をあげ、間投助詞としては「ね、な、さ」の類であるとされている。また、田中（1977）は、終助詞の例として「か、な、の」をあげ、間投助詞としては「ね、よ、さ」をあげている。ここには、助詞の重なりは見られない。

しかし、梅原（1988）では、助詞の所属に重なりが見られる。梅原は、終助詞として「か、なあ（詠嘆）、な（禁止）、ぞ、よ、わ」をあげた後、終助詞で体言につくものがあるとして、確認表現として機能する「ね／よ／さ」をあげ（「あれが富士山ね／よ／さ」）、これは、「ね／よ／さ」が間投助詞として持っている意味的特徴（表現内容を聞き手に持ちかける）が、特殊な構文的位置で形を変えて現れたものと考えられるとしている（pp. 321-324）。つまり、「ね、よ、さ」は、文中にも文末にも比較的自由に付く間投助詞であるが、体言につくという特殊な構文に限って、終助詞としての働き、つまり、文の表現類型の成立に関わる働きも持つと言っているのである。この場合の「ね、よ、さ」は、いわば「間投助詞の終助詞的用法」とでも言ってよいものであろう。

このように梅原で助詞の所属に重なりが見られるのは、「ね、よ、さ」が、意味・機能の点から、終助詞としても位置づけられるとされているからである。梅原のこの考えは、「ね、よ、さ」を終助詞として位置づけ、これらの助詞には間投助詞としての用法もあるとする考え方（2.2、2.3、2.4で扱う）に連続していくものであろう。

2.1.2 意味・機能・用法はどのように説明されてきたか

梅原が間投助詞「ね、よ、さ」は、終助詞としての働きももつとしたのは、「ね、よ、さ」が確認表現としての機能を担うことからであった。そこで、ここでは、山田（1929、1936）、橋本（1948）、田中（1977）、小倉（1985）、仁田（1982）、梅原（1988）で、終助詞、間投助詞の意味、機能、用法がどのように扱われているかを見る。

- 1) 山田 (1936)¹⁾は、終助詞を述語に関係があり常に文句の終止にのみ用いられるもので、感動・希望・疑問・命令・禁止・念押しなどの意味を有するものとし、間投助詞を、語勢を添え、若しくは感動を高めるために用いられるものとしている。
- 2) 橋本は、終助詞を、それが用いられたところで文の意味が終止するもの（禁止、確かめ、問いなど）であるとし、間投助詞については、言い切りの文節と続く文節ではイントネーションが異なることに触れているだけである。
- 3) 田中は、終助詞を、質問・命令・禁止・詠嘆といった、一定の文表現を成立させうるもので、文表現を決定する性格をもっているものと、助詞「の」に見られるイントネーションの助けを借りてはじめて特定の文表現を成立させうるものに分けている。また、間投助詞を、話し手のうちけた、親しみの情を文全体にもりこんでいくものや、呼びかけに用いられるものであるとしている。さらに田中は、間投助詞の用法として話し手の親しみの気持を盛りこむものの他に、「ポーズを作る働き」、「語句を強調する」用法をあげている。(p. 449)
- 4) 仁田は、終助詞を命題に付き、それに、話し手の命題目当てのパラディグマチックな関係を付与し、そのことによって文を完結させるといったシンタグマチックな関係を与えるものとし、「文の表現類型の成立にかかわるもの」と「文の表現類型の成立には直接かかわりなく、話し手の聞き手目当てを中心に表すもの」に二分している。そして、間投助詞（間投性終助詞と呼ぶ場合もある）は、話し手の聞き手に向けたそれらの取り上げ方を示すものとしている。

仁田によると、終助詞、間投助詞は以下のように分類される。

- | | |
|--------------------|-------------------------|
| ①終助詞 | か、もんか、な（禁止）、け、の、わ、ぞ、ぜ、よ |
| ②終助詞と間投助詞の間に位置するもの | さ、よ、の、だ |
| ③間投助詞（間投性終助詞） | ね（ねえ）、な（なあ） |

仁田は、間投助詞を「間投性終助詞」とも呼び、「な（なあ）、ね（ねえ）」をあげている。そして、終助詞と間投助詞の間に位置するものがあるとして、「さ、よ、の、だ」をあげている。「さ、よ」には、「明日は雨さ」のように、文の表現類型の成立に直接にかかわる終助詞的な場合があるとしている。仁田では、「の」「よ」以外の助詞の所属に重なりは見られないが、その名称には「間投性終助詞」や「終助詞的な場合」のような、終助詞に軸を置いた見方への傾きが見られる。

上記の分類中、②の「終助詞と間投助詞の間に位置するもの」という位置づけと、③の「間投助詞（間投性終助詞）」という位置づけの違いであるが、「さ、よ」には、「明日は雨さ」のように、文の表現類型の成立に直接にかかわる終助詞的な場合があるとしているところから、文の成立に関わるかどうか②と③を分けるポイントだということであろう。「間

投性終助詞」という名称が、2.4で見る「終助詞の間投用法」と内実が異なることは、仁田の分類では間投助詞とされている「ね、な」が、終助詞に属していないことからあきらかであろう。

- 5) 梅原も、仁田と同じように、終助詞を、「文表現の種類を決定するもの」と「表現内容を聞き手に持ちかけるもの（間投助詞に類する働き）」に分類し、間投助詞は、「表現内容を聞き手に持ちかけるもの」としている。

2.1.3 「聞き手」意識の登場

以上からわかることは、仁田、梅原では、間投助詞の意味・機能として、山田や橋本では用いられていなかった、「話し手の聞き手に向けたそれらの取り上げ方を示すもの（仁田）、表現内容を聞き手に持ちかけるもの（梅原）」という表現が使われていることである。つまり、間投助詞が「聞き手」を意識したものであることが明確になってきている。それと同時に重要なことは、仁田、梅原では終助詞の意味・機能の一つとして、「文の表現類型の成立には直接かわりなく、話し手の聞き手目当てを中心に表す」（仁田）、「表現内容を聞き手に持ちかける」（梅原）ことが取り上げられている点である。終助詞が文表現の成立といった意味・機能だけでなく、「聞き手目当て性」があることが明記されるようになってきているのである。梅原が述べているように、

（例）僕ね、昨日ね、ディズニーランドに行ったんだ。……

あの人とさ、ドライブに行こうってさ、約束してたのよね。

における「ね」や「さ」と、

（例）午後は買い物に行くのよね。

そんな馬鹿なことするなよな。

での「ね」や「な」の、表現内容を聞き手に持ちかける働きは、両者が、文末にのみ位置するか、成分の切れ目に位置するか、という違いがあるだけに過ぎない（pp. 325-326）のである。

上で見たように、仁田、梅原では、終助詞を、「文の表現類型の成立にかかわるもの、表現内容を聞き手に持ちかけるもの」という2つの視点でとらえ、間投助詞を「表現内容を聞き手に持ちかけるもの」という視点でとらえる見方が成立している。終助詞の機能には、間投助詞のそれと重なるものがあることが意識されてきているのである。あるいは、間投助詞の機能は終助詞の機能の一部という認識が成立してきているのである。

ここにおいて、「文末に用いられるものを終助詞、文中・文末に用いられるものを間投助詞とする」考え方に変化が表れてきている理由が読み取れる。つまり、聞き手意識をめぐって、これまで間投助詞に位置づけられてきた「ね」、「よ」、「さ」を、終助詞の範疇に含める素地が整ったのである。

2.2 文の終わりに来る助詞を終助詞とし、終助詞を終助詞と間投助詞相当に下位分類する立場

ここでは、終助詞を終助詞と間投助詞相当とに下位分類する研究を取り上げる。

- 1) 佐治 (1957) は、終助詞を「文の終わりに来る助詞」であり、話し手の何らかの態度を表すことを示すものとし、終助詞と間投助詞相当に下位分類している (p. 27)。終助詞の第1類は、続く文節に付き得て他の終助詞に付き得るもので、間投用法があり、間投助詞と言われるものに相当するとして「ね・な、よ・や・え・い、さ」をあげている。第2類は、続く文節に付き得ず他の終助詞に付き得ないもので、間投用法がない、せまい意味での終助詞であるとして「わ、とも、ぞ・ぜ、か」をあげている。そして、第1類のものは、話し手の聞き手に対する直接的な態度である (p. 28) と述べている。

佐治の言うところでは、終助詞の第1類と第2類は重なり合わない。終助詞を下位分類しているのだが、「文の終わりに来る助詞」で「続く文節に付き得て他の終助詞に付き得るもの」を間投助詞に相当するもの、「文の終わりに来る助詞」で「続く文節に付き得ず他の終助詞に付き得ないもの」を狭い意味での終助詞としているところは、2.1の立場に近い。しかしながら、第1類を「間投助詞と言われるものに相当する」としている点は、わかりにくい。2.1で検討した間投助詞と同じ位置づけであるということであろうか。

- 2) 渡辺 (1968) は、終助詞の構文的職能は文を終止するという点につきるとし、その意義的特徴は、聞き手に訴え、話し手自身の感情を表出するものとしている。渡辺は終助詞を、判断とのつながりを存す第1類 (か、さ、わ、ぞ、ぜ)、対象への呼びかけを存す第2類 (よ)、話し相手への呼びかけをしか存しない第3類 (ね (な)) に分類している。続いて渡辺は、「さ」「よ」は文中で第3類的に間投助詞としても用いられると述べ、これらは話し相手との直接的なつながりを示すものであり、終助詞と間投助詞との連続を示唆するものとしている。

渡辺が、「さ」を半間投助詞、「よ」を準間投助詞、「ね」を純間投助詞としているところを見ると、終助詞には、下位分類として終助詞と間投助詞があると分類していることになろう。

半間投助詞といい、準間投助詞といい、純間投助詞という渡辺の分類は極めてわかりにくい。純間投助詞の「ね」が「話し相手への呼びかけをするもの」、半間投助詞の「さ」、準間投助詞の「よ」が「話し相手のとの直接的なつながりを示すもの」としている点、「聞き手目当て性」が終助詞・間投助詞に共通する要素であると認めていることを示しているのではないだろうか。

2.3 文末で用いられるものを終助詞、文中で用いられるものを間投助詞とする立場

ここでは、文末で用いられるものを終助詞、文中で用いられるものを間投助詞とする研究を

見ていく。

- 1) 大野 (1977: 1-28) は、終助詞とは常に文の末尾に位置する (そこで文が切れる) 特性を持つ助詞であり、文の判断全体を話しの手元に持ちかけ、関係づけをする役目を持つもの、間投助詞は、いわゆる「文節」の切れ目に投入される助詞で、「あのデスネ、今夜デスネ、会合がデスネ、あることになりました」のように、相手に対する話し手の人間関係の近さ、遠さ、親しさ、上下関係についての意識、または呼びかけなどがここに表明される (pp. 26-27) としている。
- 2) 山田 (2004) は、終助詞を、発信系終助詞「ぞ、さ、わ」、確認系終助詞「ね、よね」、疑問系終助詞「か」「かい、かな、かしら」に分類し、「ね (ねえ)」「さ (さあ)」「な (なあ)」など文節の切れ目に入れる助詞は間投助詞と呼ばれ、聞いてほしいと訴えかける働きを持つ (pp. 160-162) としている。これによると、「ね」「さ」は、その置かれる位置によって、終助詞でも間投助詞でもあるということになる。
- 3) 森田良行 (2007: 322-323) は、終助詞とは、文末にあって、疑問や禁止、詠嘆・感動・念押し・確述などの気持ちを添えて文をしめくくる働きの助詞の総称である。(中略) また、「よ、ね、な、さ」等は文末だけとは限らず、適宜、文中の文節の後に添えて、対聞き手意識から、語勢を強めたり、感情を込めたりする役割を担っており、特に区別して間投助詞と名づける研究者もいる (pp. 322-323) としている。

大野が間投助詞としてあげている「ね」が終助詞でもあるかどうかは、大野が書いたものだけからは判断できないが、山田、森田からは、「ね」「さ」「な」が終助詞でもあり、間投助詞でもあるととらえられている (そうとらえる研究者がいる) ことがわかる。つまり、いくつかの助詞は終助詞でもあり、間投助詞でもあるというわけである。そして、上に見るように、山田にも森田にも終助詞と間投助詞の意味には異なりがあり、間投助詞は「聞いてほしいと訴えかける働きを持つ」「対聞き手意識から、語勢を強めたり、感情を込めたりする」というように「聞き手目当て」であることが述べられている。ここでは、「ね、さ、な」のような助詞は、終助詞であり間投助詞でもある、という位置づけが明確になされるようになってきている。

2.4 文末に置かれるものを終助詞、文中に置かれるものを終助詞の間投用法とする立場

ここでとりあげるのは、いわゆる間投助詞を「終助詞の間投用法」と規定する立場に立つものであり、2.3とは、名称の与え方に異なりが見られるものである。

- 1) 益岡・田窪 (1992) は、終助詞を解説する中で、次のように述べている。「終助詞のうち、「ね」と「さ」は、文中の切れ目に挿入して、聞き手の注意を促す働きをする。これを、終助詞の「間投用法」と呼ぶ」(p. 53)。ここでは「間投助詞」という一項は設けられていな

い。

終助詞の「ね」が、話し手と聞き手が知識を共有しているかどうかを確認するものと説明されているところから、終助詞と間投助詞の機能は異なるものにとらえていると思われる。

- 2) 『現代日本語文法4』(2003)も、終助詞とその間投的な用法という立場をとる。間投的な用法として取り上げられているのは「ね」と「さ」である。ここでは、「ね」についての記述を取りあげる。

『現代日本語文法4』は、終助詞「ね」の用法として3つをあげたあと、「ね」には間投的な用法があるとして、次のように説明している。「ね」は、文末に現れるだけでなく、文中に現れる間投的な用法をもつ。(中略) 間投的な「ね」は、話し手が聞き手を無視して一方的に話しているのではなく、聞き手を意識しながら話しているということを聞き手に示すものである(p. 260)。つまり、終助詞用法の3) 話し手が発話を続ける際に、聞き手を意識していることを示すもの(p. 259)と同じであるとしている。この説明によると、終助詞と間投助詞の意味・機能には重なりが見られる。

1) の益岡・田窪においても、2) の『現代日本語文法4』においても、「ね」と「さ」は終助詞であると同時に文中の切れ目に現れる間投用法を持つというわけである。そして「間投用法」は「聞き手の注意を促す働きをする」(益岡・田窪)のものであり、「聞き手を意識しながら話しているということを聞き手に示すもの」(『現代日本語文法4』)である。ここでも「聞き手目当て」であることが述べられている。

2.5 終助詞、間投助詞を分けない立場

終助詞、間投助詞(終助詞の間投用法)を分けない立場には、二通りある。一つは、終助詞、間投助詞(終助詞の間投用法)を分けることなく、「感動助辞」(松下大三郎)のような名称を与えるものである。もう一つは、「終助詞」で一つにくくる立場である。

ここでは、時枝(1951、1954)、白石(1968)を取り上げる。

- 1) 時枝(1951)は、対人関係を構成する助詞(pp. 8-9)として、「ね」「か」「ぞ」「よ」「な(禁止)」「なむ」「な(希望)」「かし」をあげている。

「ね」については、「一種の感動助詞」であるとして、聞き手を同調者としての関係に置こうとするものであり、「よ」は、聞き手に対して、話し手の意志や判断を強く押し付けるものであるとしている。また、時枝(1954: 227)では、感動を表わす助詞として「か、かしら、よ、な、ね、さ、そ、わ、ものか、とも、の、や」などをあげている。

時枝の記述からは、対話の相手である「聞き手」への言及が見られる。

- 2) 白石(p. 139)は、感動詞のような役をする助詞を終助詞というとして、終助詞は、文末、

文節の終わりに来ることで命名したのである、と述べている。白石によると、終助詞は、文の終わりや文節の切れ目に用いて、「か、な（禁止）、な（なあ）、ぞ、よ、ね」のように、疑問・禁止・感動・強めなどを表すものである。白石があげている例、

行ったのね。ぼくね、きょう行ってきたの。

いいさ、それがさ、なかなかわからないのだよ。

を見ると、終助詞と間投助詞が終助詞という名称のもとに、一つにでくくられていることがわかる。ここには、「聞き手」への言及はない。

3. 間投助詞をどうとらえるか

3.1 聞き手の発見

間投助詞のとらえ方の変遷は、終助詞のとらえ方の変遷でもある。それは、終助詞を、構文的職能、陳述という点から見てくる中で、間投助詞の意味・機能と両者の共通性を発見する過程であったとも言える。そして、それはまた、終助詞と間投助詞の所属に重なりがなく、二分されていたときから、重なりを当然と見る方向へ向かってきた歴史でもある。そこにあるのは、「聞き手の発見」という終助詞・間投助詞の意味・機能の共通性であった。そのような過程の中で、「ね、な、さ」のような、間投助詞に帰属させられていた助詞が、終助詞にも帰属させられるようになったのである。終助詞に文の成立に関わる機能と、聞き手目当て機能が認められたことで、終助詞と間投助詞の機能の重なりが理解されてきたとも言える。ことばを変えれば、「聞き手の発見」が、間投助詞を間投助詞たらしめてきたということである。

ここで、2節で取り上げた研究や概説書には、「聞き手」がどのように記述されていたかを、あらためて年代順に簡単にまとめてみる。

山田（1936）、橋本（1951）：聞き手に関する明示的な言及はない。

佐治（1959）：「間投助詞と言われるものに相当する」「ね・な・よ」などは、「話し手の聞き手に対する直接的な態度である」

渡辺（1968）：終助詞の第3類に分類した「ね」（渡辺の言う、「純間投助詞」）は「話し相手への呼びかけをしか存しないもの」

田中（1977）：「呼びかけに用いられるものである」

大野（1977）：「相手に対する話し手の人間関係の近さ、遠さ、親しさ、上下関係についての意識、または呼びかけなどがここに表明される」

仁田（1982）：「話し手の聞き手に向けたそれら（命題）の取り上げ方を示すもの」

梅原（1988）：「表現内容を聞き手にもちかけるもの」

益岡・田窪 (1992) : 「聞き手の注意を促す働きをするもの」

『現代日本語研文法4』 : 「聞き手を意識しながら話していることを示すもの」

山田 (2004) : 「聞いてほしいと訴えかける働きを持つ」

森田良行 (2007) : 「対聞き手意識から、語勢を強めたり、感情を込めたりする」

このように、「聞き手の発見」は、研究の早い段階から見られる。しかし、その内実がどのようなものであるかは、ここにまとめた言葉以上のものは、わからない。

3.2 聞き手を意識するとは

3.1であげた、「表現内容を聞き手にもちかける」「聞き手の注意を促す働きをする」「聞き手を意識しながら話していることを示す」「聞いてほしいと訴えかける働きを持つ」「対聞き手意識から、語勢を強めたり、感情を込めたりする」などと表現されている「聞き手を意識すること」は、具体的にどのような内容を指すのだろうか。間投助詞（終助詞の間投用法）に焦点をあてた研究はまだ少ないが、ここでは談話分析の視点から、間投助詞に迫った2つの研究、森田笑 (2007) と伊豆原 (2008) を取り上げる。

1) 森田は、終助詞・間投助詞の談話中での働きを分析し、両者を発話行為詞として位置付けることを提案している。森田はまず、

(1) いいよね：、ごはんがおいしくてね：、この街ってね：。

の例をあげ、3つの「ね」のどれを終助詞といい、どれを間投助詞というのか、そもそも話し手はこれらを終助詞・間投助詞として使い分けているのかと疑問を投げかける。その上で、「ね」や「さ」が、「話者の動き、行為、活動といったものを、その場の参加者の相互行為上の問題に合わせて区切っている」ことを例示し、「ね」や「さ」などは発話の最後に現れるにしる、発話の途中に現れるにしる、何らかの区切りをつけていること、相互行為の中での微妙な動きを示唆する機能を担っていることを明らかにしている (pp. 46-51)。

2) 伊豆原は、感動詞、間投助詞、終助詞の「ね」「よね」「よ」の談話管理機能を分析することで、間投助詞、終助詞はそれぞれ独自の機能をもっていることを明らかにした²⁾。

伊豆原によれば、終助詞と間投助詞の談話管理機能は異なる。間投助詞の談話管理機能は、大きく聞き手を発話に注目させる注目表示機能であり、談話の「時間性」と関わる機能と「聞き手に配慮」するための機能の2点があるとしている。談話の「時間性」と関わる機能とは、間投助詞を、話者が発話の保持を図るために用いたり、話者交替の際に用いたり、聞き手の理解を確認するために用いたり、発話への引きこみを図る際に用いたりすることである。そして、「聞き手に配慮」するための機能とは、正しく伝えようとしたり、わかりやすく伝えようとして言い直しや訂正をする際に、聞き手の注目を引こうとして使われるもの

である。

一方、終助詞の談話管理機能は、「聞き手への同意要求」や「同意」、「共感」、「知識の共有化」を示すものであるという。終助詞にも、間投助詞にもともに、「聞き手に対する意識」があるといっても、その内実は異なるのである。

このように談話管理という視点から終助詞、間投助詞を見ることで、これまで見えてこなかった両者の違いが明らかになる。終助詞も間投助詞もともに、話し言葉で用いられるものである。伊豆原の示しているように、話し言葉において文中に用いられる「ね」が、文末で用いられる「ね」や「さ」と異なる意味・機能をもつとしたら、両者は分けて考えるべきなのではないだろうか。間投助詞には、終助詞にない談話上の機能があることから、間投助詞を助詞の一分野として独立させて考えるほうが説明として望ましいのではないだろうか。

4. 今後の課題

本稿は、ほとんど注目されることのない、しかし、日常会話に頻出する「ね」や「さ」などの間投助詞が、これまで、どう説明されてきたかを、分析・考察したものである。間投助詞の談話分析は、ようやく緒についたばかりである³⁾。間投助詞を助詞の一分野として認めるべきだとした場合、その語数の少なさが問題になるかもしれない。わずかに数語のために、一つの範疇を用意すべきかどうかである。しかし、問題は語数の多少ではなく、意味・機能の独立性・重要性ではないだろうか。

談話分析がさらに進められることで、間投助詞の位置づけに関する説明も深まっていくのではないかと思われる。そのために研究を続けたいと思う。

注

- 1) 終助詞・間投助詞という用語は、山田 (1929: 680, 1936: 508, 517) で初めて用いられたものである。しかし、山田 (1929: 680) で終助詞、間投助詞として言及されているのは文語に属するものだけで、口語に属する終助詞、間投助詞は言及されていない。
- 2) 伊豆原が実際に取りあげている助詞は、使用したデータの関係で、間投助詞としての「ね」、終助詞としての「ね、よね、よ」、感動詞的に用いられている間投助詞の「ねー」である。
- 3) 定延 (2005) は、「ね」や「さ」とどまらない、いわゆる周辺的な間投助詞が日々行われていることに高い関心を寄せている。定延が取り上げている間投助詞には「じゃ、のう、ニヤ、ピョン」などさまざまなものがある。

引用文献

- 伊豆原英子 (2008) 「間投助詞・終助詞の談話管理機能分析—「ね」「よね」「よ」の場合—」『愛知学院大学教養部紀要』第56巻1号 平成20年度国文学年次論集に再録
- 梅原恭則 (1988) 「助詞の構文的機能」『講座日本語と日本語教育 第4巻 日本語の文法・文体 (上)』明治書院
- 大野晋 (1977) 「日本語の助動詞と助詞」『岩波講座日本語 7 文法Ⅱ』岩波書店 (pp. 1-28)
- 北原保雄 (1976) 「文の構造」『岩波講座日本語 6 文法Ⅰ』岩波書店 (pp. 33-82)
- 小倉肇 (1985) 「終助詞・間投助詞」『研究資料日本文法⑦助辞編 (三) 助詞・助動詞辞典』明治書院 (pp. 225-250)
- 定延利之 (2005) 『ささやく恋人、りきむレポーター—口の中の文化—』岩波書店
- 佐治圭三 (1956) 「終助詞の機能」『国語国文』第26巻、第7号 (pp. 23-31)
- 鈴木英夫 (1988) 「終助詞についての」構文論的研究『国語と国文学』1988年3月号 (pp. 1-16)
- 田中章夫 (1977) 「助詞 (3)」『岩波講座日本語 7 文法Ⅱ』岩波書店 (pp. 359-427)
- 時枝誠記 (1951) 「対人関係を構成する助詞、助動詞」『国語国文』20巻、9月号 (pp. 1-10)
- 橋本進吉 (1948) 『国語法研究』岩波書店
- 藤原与一 (1990) 『文末詞の言語学』三弥井書店
- 益岡・田窪 (1992) 『基礎日本語文法』くろしお出版
- 森田笑 (2007) 「終助詞・間投助詞の区別は必要か」『月刊言語』2007年3月号 大修館書店 (pp. 44-52)
- 森田良行 (2007) 『助詞・助動詞の辞典』東京堂出版
- 山田敏弘 (2004) 『国語教師が知っておきたい日本語文法』くろしお出版
- 山田孝雄 (1925) 『日本文法論』実文館
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』実文館
- 渡辺実 「終助詞の文法的位置—叙述と陳述再説」『国語学』72集 (pp. 127-135)